



## 櫓が禁止!?

櫓が禁止になる・・・生徒会からそういう話が伝わった。土佐高生としての最後の年に自分達で設計して作る運動会の櫓は、高3生にとって土佐中・高6学年の生徒に自分達の存在感を示すシンボルだった。

その櫓が、教職員会議で「危険だから」という理由で禁止となろうとしていた。

当時の土佐高は、まじめに勉学に励むだけよりも余裕を持って学校生活を送ることをかっこいいとする、バンカラの風潮を残した、冷めた見方をすれば、甘えを残した田舎の進学校であった。ただの進学校と違ってしたのは、土佐高には、権威と常識を鵜呑みにせず、たとえ幼くも「自ら考える」ことをよとする文化があったことである。

危険?なぜ、今、危険ということが議論されるのか?待ち望んでいた自分達の櫓づくりができなくなる、そのことへの危機感と、これで櫓が廃止になれば、以降の後輩はもう櫓をつくることはできないだろう。後輩達からは、あの学年で廃止になったと言われ続けるだろう。こうした思いが、土佐子特有の権威への反発心に火を付けた。そして、それは、単にノーを言うだけの抵抗でなく、今までにない櫓をつくって主張しようという方向になった。

まじめに勉強しない学年という定評の40回のなかでも、特に変わり者が多いクラスとして名をはせた3Kホームでは、私と建築家志望の高橋悠爾君とが設計、施工を担当することとなった。

ほかのあるホームでは学校の方針を理解して、従来の三層構造の櫓をやめて金属パイプの足場組で階段席を作った。背後に大きなパネルを掲げた新しいパターンだった。

ユニークな発想しか評価しない集団の3Kホームを象徴する櫓は、従来の櫓で学校に安全を主張して、なおかつそれを超える仕掛けがなければならぬ。

連日、真暗な教室に残って、ヒゴを使って縮尺模型もつくり、ビルの建築現場に出かけてナルを組む番線の結び方を習い、柱の穴の深さをどれだけ掘るかを計算し、櫓全体を覆うトラック2台分の杉枝の手配や受け取りをみんなで段取りし・・・従来と違うプロセスを自分達で一つ一つ考え、実行していった。費用は、誰かがコココーラの看板を櫓に掛けることで調達してきた。

悪名高い3Kは、自分達が主役である運動会にはプレ・イベントが必要と、御輿を担いで帯屋町を練り歩くという事件も起こした。警察から、公道を練り歩くには許可が必要だと注意されたが、帯屋町派出所に全員が集まっている間に、保護者名での申請書を作ってクリアしてしまった。首謀者は、沖広剛君だったと記憶しているが、申請書の名義が誰の父兄であったかは定かでない。

ホーム主任の松尾功禄先生は、翌朝の高知新聞の記事ではじめて御輿の事件を知られたはずだが、職員会議で一体どう説明されたのか・・・しかし、先生は、運動会の後も卒業まで一切このことについて触れられることはなかった。櫓も含めて、どのくらいご迷惑をおかけしたのか。土佐高を卒業し、責任を取る立場の年齢になるにつれて、同級生が集う席での先生への感謝の言葉が増えてゆく。

3Kホームの櫓は、見かけは規定の高さにおさめながら、認められた三層構造の上にこっそり第四層目をもった過去最高のものができあがった。運動会の当日は、噂を聞きつけて、ほかのチームの下級生たちが続々とその第四層に上がりに来た。そして、櫓はびくともしなかった。

櫓は、単なる応援の手段としての構造物ではなく、意味のある存在だと考える・・・。危険であることがプロポジション(論題)なら、安全以上の価値を創って論そのものを超えることを考える・・・。それを、現実のものにするために、従来の作業ではないプロセスを考える・・・。皆、幼いながら既成の思考を超えようとする考え方は持っていた。

我が国でも、組織の成功には絶えざる思考プロセスの変革が必要である、という経営品質の考えが広まりつつある。私にとって、その経営品質の核である思考変革の基礎を育ててくれたのが土佐中・高校の風土であり、象徴が運動会の櫓だったように思う。

運動会が終わった夜、櫓を飾った杉の葉を燃やすファイアーストームの火を何か思い詰めたように見つめていた友の顔がいまでも懐かしい。

40回生・Kホーム 藤田 光一



## 人生勉強の場

当時のやぐらは丸太を番線で縛って組み上げていました。担当者だった私は、どうやって作るのか全く分からず、模型を竹ひごで作製することから始めました。その頃のやぐらは箱型かスタンド型がメインでしたが、その両方を組み合わせたものが出来ないかと苦心したものです。結局、下段に観覧席、その上にテラスを設けました。当然、構造計算も何も無しで組み立てたのですから、今思えば恐ろしいものです。現在、建築設計に携る私にはとてもその勇気がありません。建て方は鷹の親方に「シノ」の使い方を習って妙に興奮しました。

思えば、それらのことが現在の仕事を選ぶ動機になってしまいました。これらの作業で先述の親方や塗料店の主人など色々な「市井の大人」と交わることができたのは、とても大きな勉強になりました。私にとってやぐらとは学問以外の大切な人生勉強の場になった様です。

44回生・Oホーム 西山 賢



## 新グラでの初やぐら

事件は起きた。やぐらの廃止が告げられたのだ。この年は新校舎(現校舎)を建設中で、運動場が使えないため、新グラで運動会を開くことになった。当時のやぐらは丸太で、柱を立てるのに地面に穴を掘っていたのだが、新グラは整備されているので掘ってはいけない、というのが理由だった。納得できない我々は、先生方と話し合いを続けていたが、いかなる手を使ったのか? S.K君が、建設会社に話をつけてきて、足場パイプが借りられることになり、やぐら建設はOKとなった。\\(^O^)/

建て始めて再び事件は起きた。某ホームのやぐらが、女性が脚を広げているように見え、まかりならぬ、というものであった。しかし、作者のT女史の涙の訴えや、級友達の熱き支援で、このクレームは取り下げられた。今となっては懐かしい思い出である。

やぐら建設の最終日、日暮れた頃にホンダN360が近づいて来て、ヘッドライトをつけた。その明かりの下でどっかのホームが突貫工事をやっていた。

46回生・Kホーム 富永 邦昭





## 僕たちの世界遺産

10月のとある日NHKの「世界遺産ここに行きたい!」に出てきたタージ・マハル。「あっ!これ僕たちが作った」という声と共に突然甦ったやぐらの思い出。

34年前の秋。期限ぎりぎりの夜中2時、やぐら作りの最終作業のこと。夜中の雨の中に誰が来ているのかなと思いつつ合羽姿に懐中電池をもって新グラに行ったら、多くのクラスメートがいた。雨で滑りながらも作業が始まり、時間を気にしながら泥のグラウンドに足場を築いていた。初めて経験する鉄パイプでの作業だったが、出来栄は満足できるものとなった。やぐらのデザインは森君が提唱した世界史の教科書にあったタージ・マハル。真っ白でエレガントな姿に我々の夢をかけたのだろうか。やぐらは高さ規制どおりに出来上がったが他のクラスのものよりは小さいことがわかり、急遽ポールを高くして旗をつけたことも競争心からか。デザイン描きや組み立てをクラス総出で作成したことが何よりの青春の思い出だ。

47回生・Tホーム 山中 令士



## 若気の至り

47回生3Hホームは故西森茂夫先生の下、個人的な人間は多かったが、案外団結力のあるホームであった。「ヤグラ」の構想は誰が練ったのかは今では定かではないが、西森先生の平和主義に反抗?して、確か軍艦型であった。

運動会の数日前から昼休みの間や放課後必死になって作っていたが、どうしても間に合わず、当日の早朝といっても午前2時頃、雨の中有志が集まり、当時生気にも自動車通学していた私の車を運動場の中に乗り込ませ、そのライトを頼りに作業をして何とか朝までに仕上がった。

次の難問である軍艦の砲身からの煙であるが、当時からタバコを嗜んでいた私を含む4~5人で一斉にヤグラの中で吸い、その煙で代用した。

今考えれば、若気の至りで校則などあってないようなもの。先生方には色々ご心配をお掛け致しました。ゴメンナサイ!(しかし、楽しかった。)

47回生・Hホーム 伊野部 武男



## バレたらどうしようか

昭和46年秋、運動会の準備が近づくと、何かしら高揚するものがあり、その気持ちを全部やぐら造りに向けたような気がします。

リーダーとなったのは、今は亡き尾立君で、いつもはこんな時にあまり前が出るタイプではないのに、この時はえらく彼が張り切っていたのを思い出しました。

何を造るかは簡単に決まったようで、「スフィンクスを造るんや」とすんなり納得した覚えがあります。

このスフィンクスの絵に、私達数人は大変ないたづらをしました。題材がエジプトなので絵の隅の方には、当時の人や馬や暮らし振りを、横方向にたくさん書いた模様がありました。この中になんと枕絵をいくつか書いたのです。

最初はバレたらどうしようかと思いましたが、意外と気付く人も無く、数人の共犯と共に密かに楽しみました。(コメントナサイ)

47回生・Oホーム 小川 潤一



## “愛”のテーマ 「あいらぶ湯」追想

47回生Kホームのテーマは、須く“愛”であった。前年高2の仮装では、ロミオとジュリエットの純愛あり、貴一・お宮の破綻の愛あり、武蔵と小次郎は実はホモ達同士の同性愛であり、主任の岡部先生に至っては、なんとご自身の体をスッポリ包む張りボテのリンゴを纏い、エデンの園で蛇悪者に食べることを唆されたアダムに扮する、人類生誕の愛だった。

激論の末、“愛”にこだわるとKの櫓は「あいらぶ湯」となった。下絵は何故かTの森裕司君が請け負ってくれて、式亭三馬の『浮世風呂』を題材に、銭湯の女湯が背景だ。ここで主任は慌てた。運動会当日に「ありや、何じゃ」とクレームがついて、公開禁止処分になったら…。職員会で苦心の弁明、ようやく了解を取り付けて製作OKと相成った。さて、主任の苦勞を知り、女身の姿は赤裸々な描写は控えようと衆議一致し、艶めかしさは極力抑えて、マンガチックに中澤陽ちゃんが湯屋風景製作仕上げを仕切った。

又々議論の末、製作費用を浮かそうと、パイプ組立は和建設に依頼して、これは本職、あっという間に出来上がり。暖簾等では、破れない紙を池田紙業から提供してもらった。更にCM料を頂戴しようという悪知恵で、「坂上商店」「佐々木薬局」「レストラン高知」等の看板を張り巡らし、かくしてホーム財政は潤沢となった。すべて同級生の家業の協力の賜物である。

而してその後、櫓のCMが大流行となり、運動会禁止規定の一つとして、中央公園の鳩捕獲・要法寺の竹無断切り出しと共に、実在の会社名・商品名のCMは御法度となったとか…。我らの「あいらぶ湯」は正にKの面目躍如であった。

47回生・Kホーム 坂本 隆



## 待ちに待った5年

今の生徒たちもきっと同じ気持ちになると思うのだが、中1の運動会で見た「ヤグラ」に感動し、高3になったら自分たちで作れるがやと、待ちに待った5年だった。新校舎建設のため、新グラでの2回目の運動会、突如「ヤグラ建設のためにグラウンドに穴を掘ったらいかん」というお達しが…。「ヤグラを立てるなちゅうことかえ?」「冗談じゃないでえ」…。すったもんだありまして「足場用パイプならOK」を取り付けたことだった。

Sホームは全体のデザインを円鏡こと柏原が担当、『中世の城』をイメージしたメルヘンチックなものだった。そしてこだわったのは、主任(正木先生)の似顔絵だった。問題は誰が描くかであったが、何となく身近に描ける者がいて万事解決。原画は岡山が描き、今でも正木先生宅に飾られていて、「オレの葬式にはこれを使ってくれ」とおっしゃっていましたが…。

さて、再び問題が発生。どうやってベニア板に書き写すか? これは松村がいとも簡単に解決した。日が暮れ、暗くなった新校舎屋上にベニア板を並べ、スライド写真にした原画を映写し、それをなぞるプロジェクトX。現在のように機械警備でもなく、実におおらかな古きよき時代だったのだろう。

足場用パイプは棧橋通3丁目の建設会社から借り受け、デザインに基づいて骨組を考え、現場で陣頭指揮に立ったのは、実家が建設業だった大谷だった。とにかく速かった。組み始めて作業完了まで、Sホームが一番速かったように記憶している。運動会前日の夕方には完成していた。今回、掲載されているのは、その時の写真である。

47回生・Sホーム 岡田 容典



## 律子さん♪律子さん♪

私達の年になって、学校側から「木組みのヤグラは危ない。この際ヤグラは廃止する。」と言われ、愕然。やっと「足場用のパイプならOK」との許可を得たものの、調達は生徒側の責任ということになった。OBのやっている土建屋さんを紹介してもらい、他のクラスの代表と一緒に交渉に臨んだが、何せ払える金額はただ同然で往復の運搬も相手側という虫のいい話。社長もあきれていたが、ついに根負けしたか最後には気持ちよく協力してもらえた。今の自分からは創造できないバイタリティを発揮したものだ。

Nホームは、当時流行っていたボウリングの中山律子をテーマとし、玉が転がるとピンが倒れるといった凝った物を製作した。さらにCMソングを流すことを企画し、学校側からは却下されたにもかかわらず、裏の民家と交渉して電気もらい、運動会当日にケリラ的に実行した。もちろん即座に中止されたが、一瞬でも音が流れたことに大満足であった。

また、私の我儘で盤面の片隅に6×6ドット、8文字の文字盤を作ってもらったものの、本番ではクラスの皆は忙しくて操作する人がなく、ずっと同じメッセージが出っ放し。アイデア倒れだったかと一人いらついていたら、そのうち何人かの中学生が触り始め、次々に気の利いたメッセージを作り出すのを見て胸が熱くなったことを思い出す。

47回生・Nホーム 井上 章夫



## ほろ苦い青春の1ページ

昭和47年10月9日、体育祭前日の深夜。自分の記憶では、おそらく前代未聞のスポンサーの会社名が入った櫓、今はもう存在しない後樂園球場のスコアボードをまねた紫組の櫓が新グラで月明かりに照らされた。建築会社からお借りした工事用足場と、木材会社から無料で提供していただいたベニヤ板、ともに3Kの保護者であった。感謝の意味をこめて、会社名を大きく掲示したことで、多少なりとも、物議を醸した事を、後日、主任の故山本直四郎先生からお聞きし、あらためて大らかな土佐高の校風を再認識したのを覚えている。

この年、野球部が宿敵高知商業に南四国大会決勝で惜敗した事もあり、当初は甲子園球場の計画が、横幅の規定にかかり、やむを得ず後樂園となり、6人のメンバーで製作にかかった。20枚を超えるベニヤ板の切断のための製図を一晚徹夜で一人で描き上げてくれた猛者、塗装作業に入ると、一心不乱の境地で作業に没入するプラモデル作りの達人、竹の切り出しのため、授業時間に天神橋を堂々と竹を担いで渡った経験も一度や二度ではなかった。

若さのなせる業か、ホームゲームの踊り・衣装のグループと、完全に決裂状態のまま、体育祭直前まで踊りの練習を無視し続け、気を利かせた一人の女子が深夜に握り飯を差し入れてくれたのがきっかけで、頑なに硬派を気取っていた小生達櫓製作連中の態度が一気に軟化し、高校最後のクラスの思い出に傷が残らなかったのは、今になっても汗顔の至りである。あれから既に30年以上が経過し、時折ホームページで先輩達の作品を見る度に蘇るほろ苦い青春の1ページである。

48回生・Kホーム 上杉 直彦



## 午前1時集合

先輩達が作ってくれる色とりどりのヤグラを背に、毎年競技してきたが、いざ自分達の番になると、学校側の安全への配慮により、高さ、幅等の大きさの制限、使える部材の材質・数量の制限、そのうえに、組み立て概要書のチェックありと、なかなかハードルは高かった。

ホームゲームの振り付けの進捗との相関関係もあり、何と前日の夜遅くになっても完成できずに下校指定時刻を迎えたが、「いったん解散、明日は午前1時集合。」と次の段取りを告げると、心配して見守ってくれていた井上担任が、「どんな計画をしようがな!」と、とうとう爆発、即刻解散となり、絶望的な運動会の朝を迎えた。

が、悪運が強いのか、運動会は雨で順延、主力選手達を中心に、夜陰に紛れて大挙駆けつけ、大雨の中、徹夜でビニールシートを押さえるなど、建設半ばのダンボールの壁を身を挺して守り続けた。

こうして、神殿の真っ赤なジュウタン(紙製)は濡れて使用不能となったものの我が城は余裕を持って、堂々の完成をみたのであった。

我々のヤグラは、1階がギリシアのパルテノン神殿、2階は中世の古城を模しており、隣のヤグラを直接攻撃できる弩(いしゆみ)まで備えていた。ヤグラの上では、もし万が一、最終種目の責任リレーで、黄色以外の鉢巻きの最終ランナーが、我がヤグラの前を先頭で駆け抜けようとする場合には、これで砲撃のうえ、重装歩兵を繰り出して力づくで阻止するぞといった過激な氣勢を上げて、準備作業そのものを楽しんでいた。

そして、ここまで来たら、優勝はこっちのものだと、城の上では皆、確信に満ちていたのだが。

そのSホームの精鋭達が、高らかなファンファーレに引き続いて、ようやく始まった本番の競技の中で、なぜ早々に力尽きていったのかは、後世の歴史家諸氏の判断を待ちたい。

49回生・Sホーム 橋本 雅彦



## あの竹は…

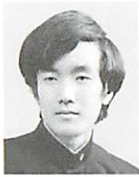
卒業後、30年が経過して、このような文章を書くことになるとは、夢にも思っていなかった。何故、小生がここに「体育祭での櫓作製の思い出」を書くことになったのかは、紙面の都合上割愛させて頂くが、縁とは不思議なものである。

先ずは、大分忘れかけた記憶を手繰り寄せる事にしよう。

小生は当時Tホームに在籍していた。昭和49年の秋、その年の体育祭での我がTホームの櫓は「羅生門」に決まっていた。どういう経緯でそうなったのかはもう思い出せない。クラスの皆それぞれが何かしらの役割を分担して総がかりで櫓の作製に当たるのは今も昔も同じであると思うが、小生達の任務は櫓の骨格に使う竹(相当長く丈夫でないといけない)の調達係であった。当時は今と違って、足場にしても建設現場で使う鉄製パイプなどはなかったように記憶している。小生「達」というのは、このような仕事はたいそう大変なので、ある程度的人数が必要であったのだろう、5~6人ももっと居たように記憶しているが、このメンバーが前日に小生宅に集まり、一室で車座になってなにやら別の準備をしつつ騒いでいたことを覚えている。老母によると夜なべの作業であつたらしく、夜食に握り飯を作って持って行ったということである。確か夜も明けやらぬ暗がりのなか小生達は自転車で竹を調達する場所に向かった。その場所とは学校に程近い烏山の中腹(筆山から入ったのでそれ程遠くではないと思う)であった。まだ暗いなか人気のない烏山に登り、手ごろな竹を探しては切り出し、自転車二台一組になって学校まで持っていったと記憶している。

こうして調達された竹を使って我がTホームの櫓「羅生門」は作られたのであるが、その過程はあまりよく覚えていない。しかし出来上がった「羅生門」をみて、見事なまでにうらぶれた雰囲気か漂うなかなか味のあつた「羅生門」であったと小生記憶している。結局小生の櫓の思い出は大変な思い出をして仲間と竹を調達してきたことに尽きるようである。因みにあの竹はちゃんと持ち主に断って使わせて頂いたのであろうか?今でもその点が気がかりではある。

50回生・Tホーム 目代 英二



## 青春のスコアボード

昭和50年。春の全国優勝校・高知高校を撃破し、南四国大会で奇跡の逆転優勝を経て、久しぶりの甲子園出場。同級生がグラウンドを駆け抜ける姿に歓喜した夏だった。秋の運動会ではその甲子園のスコアボードが出現。イスカandalを目標したヤマト、瓦の一枚一枚を再現した高知城、世界へのあこがれを誘った凱旋門とエジプトの古代遺跡。

この年のやぐらは、後年の「人気キャラクターの顔」と異なり巨大建造物が中心であった。そんな中、アニメ漬けで育ったわれわれには「テレビ」という砦は象徴的であった。各やぐらを彩った「あぶさん」「がきデカ」「つる姫」「ドナルドダック」などのミニキャラクターも当時のわれわれの気質を表している。「沖縄海洋博覧会」・「タワーリングインフェルノ」・「なごり雪」・「前略おふくろ様」・「広島カープ優勝」・「台風5号高知直撃」・「日本赤軍クアランプール事件」・「ベトナム戦争終結」。さまざまな事件・流行に囲まれながら翌年春土佐を卒業した。

51回生・Tホーム 岡松 宏明



## アヴァンギャルド、Oホーム

鼻水を垂らし、呆然と大口を開けた幼稚園児の頭の前に、誇らしく居並ぶ60人の少年・少女。「祝 仏滅」の垂れ幕。実にアヴァンギャルドな28年前の我々3年Oホームの勇姿である。

幼稚園児の名は「まことちゃん」。当時はやっていた連載漫画の主人公である。怪奇漫画の巨匠、楳図かずおの原作になる、この破天荒な男児が何故、われわれのヤグラに採用されたか、記憶にない。要は相性だったのだろう。以下、勝手に思い入れてこの稿を記すことをお許しいただきたい。

Oホームは自分も含め“のか”で無邪気に青春を謳歌するタイプが多かったように思う。先ほどアヴァンギャルドと書いたが、つまり目立ちたがりやのバカである。シュールな行動で周囲をかきまわす「まことちゃん」と我々は相性がピッタリだったのだろう。

バカ少年軍団は運動会の演出に燃えに燃えた。一世を風靡した「嗚呼！花の応援団」に感化され、大量の緑布を仕入れ、特大の応援旗を作りはためかせた。とにかく目立つ応援スタイルを、ということで、農大名物の大根踊りも披露したりした。甲斐あってか、わがみどり組は「まことちゃんヤグラ」の前で見事、凱歌を歌うことになる。

実にアホらしい青春のひとつまでであるが、私にしては未だ夢に見るほど大切な思い出である。

娘の入学を機に28年ぶりに母校の運動会に足を運んだ。趣向をこらしたヤグラが並ぶ新グラの風景は当時のままだ。なんと緑のヤグラに翻るあの旗は、我々が作ったあの旗ではないか。中内先生揮毫の誠の文字が堂々とはためいているあの時の風が吹いた。

モリゾー、キッコロのヤグラの上から手をふっているのは昭和52年秋の私達だった。

53回生・Oホーム 町田 亥作



## 熱くなったヤグラ作り

当時、私は無気力、無責任、無感動の三無主義を地でいっていました。我がクラス「K」は全体的にはおとなしく目立たないクラスでしたが、運動会だけは違っていました。

クラスの皆が、運動会までに約1か月間、一致団結し、朝早くから、夜は日が暮れるまで頑張った甲斐があり、「もう間に合わない」という予想を覆し、とうとう運動会前夜には立派なヤグラが完成しました。達成感と共に、何とも言えない感動が、こみ上がってきました。この絆と涙の結晶を誰よりも早く見てみたい一心で運動会当日、朝も明けやらぬうちに新グラへ一番乗りしたあの行動!!あの時だけは三無主義返上の熱血人間となっていました。

これだけの感動を味あわせてくれた土佐高に「本当にありがとう」といいたい。

53回生・Kホーム 岡西 裕公



## 世代を超えて

昭和47年、秋、はじめて迎える土佐の運動会。「何だこりゃあ・・・!!?」、新グラのぬけるような青空に、そびえる「やぐら」を見たときの驚きを、今でも鮮明に覚えている。

中1の僕達は、初めて見る「やぐら」に興味津々。早速、友人達とこっそり中に入ろうとして、無精ひげの上級生に怒られた。

5年後、自分達が苦勞して作りあげた「やぐら」。今度は我が物顔で出入りできる。頂上から見下ろす気分は最高だったが、気がかりなのは今年の「やぐら」が5年前のように後輩達を驚かす事が出来るだろうかという事だった。

そして今年、高3の息子がそれはそれは熱心に「やぐら」を作ったというので、28年ぶりに土佐の運動会を見に行った。何人かの懐かしい顔と束の間の再会。息子達の作った「やぐら」の下で30年前の土佐高生同士、昔話に花を咲かせているうちに、当時のクラスメートや先生方の顔、応援の歓声土煙の匂い、バトンを握り締めて走る感触までもが思い出された。その日、再会した旧友達だけでなく、元土佐高生全員がそれぞれの「やぐら」の思い出を持っているのだろう。

「やぐら」の思い出は、世代を超えて土佐高生をひとつにする。息子達も今年その仲間入りをした。

53回生・Sホーム 岡本 康生



## モルが怒られたらしい・・・?

仮装の大道具に規制ができるきっかけを作った我クラスは、やぐらの題材でも主任(西川正信先生)に随分迷惑をかけたようです。漫画家を目指していた1君の絵力を活かそうということで、当時人気のあった鴨川つばめの「ま

かろにほうれん荘」を最終題材にすることはすんなり(たぶん)決まったのですが、「絵だけじゃつまらんから背景が変わるようにしよう」と言い出す奴がでて、結局、巨大な手がたばこの箱を持っているやぐらを作ることに。たばこも、ちょっとしたウィットが必要だろうという事になり、「峰」をもじって「西峰」(よく強打で殺されなかった)、「Seven stars」の「s」を取って「Seven star」、「hi-lite」を変形させて「hoi-lite」の三枚を作成。一番印象深いのが「Seven star」。みんなで星の数を数えたら全然あわなくて、人間のいい加減さを痛感。さらに、教室内でスプレーを使って星を描いていると、急に「おお～、ええ気持ちになってきた」という仲間が出てきて背中に汗が・・・まあ、青春のいい思い出にはなりました。ところで、運動会後、「職員会でモル(西川先生の当時のあだ名)が怒られたらしい」という噂が流れ、先生に恐る恐る伺ったところ「そんなことはない」の一言。真相は未だに藪の中です。

53回生・Nホーム 武市 暢久



## 大変だったペンキ塗り

先日、我が54回生Hホームお世話役の西本アックンから電話があった。「益井、運動会のヤグラの事憶えちゃう?」「え、ヤグラ?ヤグラ?!」とやりとりの末、私にこの文章を書く役が回ってきた。

運動会はもう27年も前の事だし、ヤグラの製作担当は確か上島だったけど、彼は自分より受け持ちの患者さんの為に働き過ぎて、平成10年、37歳の若さで早すぎる旅立ちをってしまった(同窓会などの節目節目で「上島がおつたらなあ」と今でも寂しい気持ちになることがある。合掌)。彼に代わりこの文章を書かせていただきます。

Hホームは「ホワイトハウス」を造ったけれど、詳細は思い出せない。久しぶりに卒業アルバムを紐解いてみる。好きだったけれど思いを伝えられなかったあの娘、お世話になった先生方、地味だったけど結構いや随分楽しかった高校生活、あつという間にその頃にタイムスリップしてしまった。

肝心のヤグラの写真は…ありました。「平面的な物でなく立体的なものにしよう」ということで、建物にしよう、そしたら屋根があるので少しの雨でも大丈夫、柱も建てよう、という風にしてホワイトハウスに決まったのを思い出した。

壁や屋根はベニヤの合板、柱は長さ6mにもなる太い塩ビのパイプ(これ誰が運んだらう?結構大変だったはず)を白いペンキで塗った。3つの窓にはそれぞれ、タキシード姿の曾我部校長先生、蝶ネクタイに胸に名札をつけた我が担任の三浦先生「ナイッ、フィーバー、ナイッ、フィーバー」が走り回っていたジョン・トラボルタの恰好をした熊長先生の似顔絵。

大変だったのは白いペンキ塗り。何回塗っても、ベニヤの茶色が薄く透けて真っ白には見えない。結局運動会当日も私が行ったときには、もっと早くから、既に何人ものクラスメイトが来ていた。そしてぎりぎりまでペンキ塗りをして、最後に星条旗をてっぺんに立てて完成した。

「ヤグラから紙吹雪をまくなよ」と言われていたのに、「まあえいろう」とまいてしまい、皆んなで一枚一枚を全部手で拾った事も、今になっては懐かしい思い出です。

54回生・Hホーム 益井 博史



## いったい誰がカニにしたが?

某女子が叫んでいたのを覚えている。大きな二本のハサミに可動性の八本の足。ご丁寧に小さなカニのイラストが無数に描き込まれているからには確かにカニには違いないだろうが、いくらチームカラーが青色だからといって、「青いカニ」は無かろうなどとボヤキながらも、朝焼けの中、完成したその勇姿?に我々半徹夜組は漠然とした満足感に浸っていた。

「ヤグラ建設班」なるものは無かったように思う。何となく寄り集まった輩たちが、とりあえずデザインについて話し合いはしてみたものの結論も出ず、時間が無いからと得点板など必要最小限のパーツから作り始め、気が付いたらとにかくそれぞれが担当する意味不明な物体を当日朝までに完成させることだけに必死だった。得点板は大楯、大きなハサミみたいなハリボテは幸秀と平井、ペランダでは大元が青白のベニヤ板を乾かしゆうし、岡村の総ちゃん、なんで「マカロニほうれんそう」のイラスト書きゆうが…?完成予想図はいったい誰の頭の中にあつたんだろう。

前日深夜の降雨に驚いて、某「高見山荘」からビニール袋片手に完成半ばの現場に急行したおかげで、当日朝の集合時間に遅れた我々半徹夜組の目の前には、既にもうほぼ完成した青い「ヤグラ」が光り輝いていた。そのとき呟いたのは誰やったっけ?

「いったい誰がカニにしたが?」

PS 「ならぬ堪忍、するが浪人」なんていう垂れ幕は誰が作ったがな?

54回生・Nホーム 岩田 耕三



## お〜い静かにせえよ

ヤグラ作りは、計画段階から、あ〜でもない、こうでもないとい熱い議論が続き、ラスト1週間での突貫工事になりました。昼間に与えられた時間では足りなくなり、休日はもちろん、夜中に懐中電灯や夜食(その中に、アルコールがあつたかどうかは、今となっては定かではない)を持ち寄り、けっこうな人数が作業に取りかかりました。野球部の寮や近所に知られないように、それは慎重にかつ静かに夜遅くまで作業は進行了ました。夜露に濡れて朝日を迎えた強者も中には居ました。

数十年たった現在だからこそ明かされるエピソードでした。

55回生・Oホーム 島崎 剛



## 「鳩を飛ばすか!」この一言から…。

実家が竹島町の新グラのすぐ近所ということもあり「ヤグラ関係でなにかやらかすこと」は小さい頃からねらっていたのかもしれない。

それで思いついたことが「開会式と言えば鳩、ヤグラのてっぺんから鳩を飛ばすか!」。もちろん訓練された白い鳩は準備することはできません。そこで「中央公園にいぎやだの鳩はナンボでおるやる」ということになり運動会当日早朝(というか深夜)やぐらを造り終えた後、真っ暗な中央公園の公衆トイレの上にあつた大きな鳩小屋に忍び込みました。闇のなか無数の鳩が寝静まっておりますが、我々数人がこっそり入つたとたん鳩小屋の中は大パニック。掴んで引っ張って羽がぬけた時のあのなんともいえない感覚を忘れることができません。なんと数十羽をダンボールに入れ持ち帰りました。

そしていよいよ開会式、「こや、段ボールをあけえ、鳩を放せ!」しかし鳩は飛び立つことなく、段ボールの中はまさに“豆鉄砲をくらった”状態、仕方なしに段ボールごとひっくり返したら四方八方、中には下に落ちていく鳩もいる始末…。 “かくしてヤグラから鳩が華々しく飛び立つ”という企画は大失敗に終わりました。以来25年、私は広告&イベント業を営んでおりますが鳩のセレモニーだけはやらないようにしております。

56回生・Oホーム 濱口 豊



## 応援団長として夢が実現

「やぐら」に対する想いを、と問われれば40年近く昔の幼少の頃に遡らなければなりません。

私は、「新グラ」の近くで生まれ育ちました。周辺住民にとつても、当時から秋の風物詩となつてきた土佐校の運動会は、当たり前のように物心つく前から私の身近にあつたのです。

千人近い生徒が参加する運動会は壮観という言葉がぴったりで、子供ごろには「お祭り」そのものでした。その中でも、西洋のお城や怪獣ヒーローをかたどつた「やぐら」はまさに「テーマパーク」のようで、心を躍らせながら見上げた記憶は今でも鮮明に残っています。

「いつか、あのてっぺんに登ってみたい。」その憧れの気持ちが、土佐校入学を目指した最大の動機になったことは言うまでもありません。

そして、応援団長として夢が実現したあの秋の日。景色も最高でしたが、何と云つても、平素は頭の上から先生方をまるでお殿様のように「やぐら」の天守閣から見下ろす気分は爽快で、ひとりニヤニヤと悦にいついていました。

毎年、秋が来ればそのことを思い出し、「やぐら」に会える日を楽しみに待っています。

59回生・Oホーム 小島 清文



## 気の毒なことを・・・

Sホームでは「バックスクリーン」を作りました。やぐらのデザインは曲面が主流でしたので、決まったときは少々物足りなさを感じたのですが、出来上がってみるとなかなかきれいに仕上がったようです。手取り早く高知市営球場のものを参考に作り始めたものの、「やっぱりバックスクリーンは甲子園やろう」ということで徐々にいろいろ付け足していきました。中央の画面はベニヤ板4枚を並べ、回転式にして何枚か絵が次々変わるようにもしましたねえ。挙句に、「甲子園の開会式には確かハトも飛びよったぞ」ということで、公園で捕獲してきたハトを放しました。ところが、一週間近く廊下のダンボールの中で過ごしてきたハトにとっては「元気よく羽ばたいていく」というのはどだい無理で、かごのふたが開いても中でぐったりしたりとぼとぼ歩いているハトばかり。ハトには気の毒なことをしました。それから余った(?)材料と塗料を使ってN沢君とM地君がガメラを作ったのを覚えてます?これもなかなかのどきばえでしたよ。ひょっとするとハトよりもよく飛んだかもしれません。

60回生・Sホーム 中城 満



## 髪が抜け落ちるケンシロウ!

1985年夏の高校野球。中山投手擁する高知商業が準々決勝でPL学園と対戦する日、高校棟の屋上で、私たちのやぐら作成は開始した。作るのはマンガ「北斗の拳」の主人公「ケンシロウ」。

難しいのは、ケンシロウの髪型。ツンツンと上を向いた髪をどうやって作るのか。素人である私たちは髪を頭皮に糊づけするという作戦に出た。

運動会前々日、9月21日。最後の仕上げで、髪をどどんつけていくが、糊が乾かない。しかも天気は雨。明後日の運動会は開催されるのか?16時、学年主任の岡部先生に、「明日はあるがですか?」ときくと「ないと思うよ。」その言葉を信じて、照準を9月24日に合わせ、さらに髪を増やした。

9月22日、学校に行くと、運動会は23日に開催されるとの報。「ひえー、糊が乾いてないよ!」力をあわせてやぐらに持ち上げたケンシロウの頭からは、ポロポロと髪の毛が・・・。20年後の自分を見るようであった。

61回生・Kホーム 宮地 貴嗣



## 甘く青臭い やぐらの思い出

やぐらの思い出は、雨の記憶に繋がっている。僕はSホーム。ネタは、当時流行っていたロックバンド聖飢魔IIのリーダー、デーモン小暮さん。どのクラスも当時の世相や流行を巧みに取り入れていた、と言いたいところだが必ずしもそうではない。Nの中曽根元首相はいいとして、Tは大魔神、Hはゲゲゲの鬼太郎、Kは仮面ライダー、Oにいたっては、ゴン太くん、ときた。もう何でもありだ。



ぼくらは、やぐら担当とホームゲーム担当に分かれて準備に入った。やぐら担当は、たいてい男ばかりで、放課後などに学校の玄関前のスペースを占領して行った。竹や木で組んだ枠組みに段ボールや新聞紙やらを糊付けてハリボテを作る時、いつも雨にたたられた。軒下での作業だったが、なかなか糊が乾かず、進まない。それをいいことにできかけの段ボールの筒の中で、男同士取り留めもないおしゃべりに耽ることが出来たのもいい思い出だ。

作業にはずいぶん手間取った。“やぐら組”は、ホームゲームの練習にもろくに出ず、女子に怒られながら必死に製作を続けていたが、間に合わない。当日前夜。夜の作業は禁じられていたが、午前3時頃だったろうか「夜じゃない、朝だ」と変な理屈をつけて新グラに集合し最後の仕上げにかかった。夜中にクラスメイトとわいわいがやがや。近所の家から「うるさい!」とお叱りを受けた。お騒がせをして申し訳なかったが、夜中の作業はなんとも楽しかった。途中で女子からおにぎりの差し入れが届いたりもして、ぼくらはがぜん張り切ったものだ。

運動会の日までずっと雨だったわけではないだろうが、運動会そのものも雨で延期になったように覚えている。しかし結果的にはその雨がなければやぐらは間に合わなかった。完成したのは当日の朝8時を過ぎていたのだ。

本番。応援合戦、はたまたクラスの壁を越えてライダーショーが始まったりと、ぼくらの運動会は大いに盛り上がった。デーモンやぐらもなかなかの出来映えて華を添えてくれた。みんなで力を合わせて作ったやぐら・・・。充実感もひとしおだったはずだが、そんな甘く、青臭い臨場感は今も残っていない。ただ本番のほとんどの時間、心地よい疲労感に包まれながら、やぐらの片隅で寝ていたことは、ちょっと誇らしい思い出として、今もはっきり覚えている。

62回生・Sホーム 池 聖

62回生・Sホーム 加茂 雄二

## 奇跡のアンパンマン



あんパンをやぐらの上から投げるという企画は事情によりささやかなモノになりましたが、単純な形の迫力とバックの楽しいイラスト。特に中学生には人気でした。

今ほどポピュラーな存在ではなかった“アンパンマン”。

この形なら作りやすいだろうと判断して登場した割に製作難航。一足早く届いたマスコットのアンパンマン人形に涙しつつヒトコは“これ大きくなりませんか。”が、追い込まれてからのSホーム?分割状態の頭を完成状態で運ぶ決断してくれた人、渡り廊下を使って目と鼻の取り付けに苦労してくれた人、差し入れと遊びに興じて?雰囲気盛り上げてくれた人?

その活躍と雨天順延もあり完成した部品達は、運び込まれると最後の巨大な頭までがあっという間に取り付けられて、グラウンドにその姿を現したのでした。夕陽に照らされた姿を見上げてまた涙。天気まで味方に付けたトボケタ顔の割に結構奇跡のアンパンマンでした。

65回生・Sホーム 木村 政文



## ありがとう素晴らしい運動会

土佐高史上初の二日連続の台風による休校の後、突貫工事の運動会準備。何とか間にあわせなければという焦りと、「雨男」復活の危惧とが交錯していても立ってもいられない状況が、木曜日午後から金曜日に。ギリギリしながら、しかし生徒諸君の落ち着いていることに救いを感じつつ、金曜日の夕方には、少なくとも我がクラスは絶対大丈夫の確信を得るところまで来ました。ヤグラの組み上げにはいささか手を出しすぎのざらにはあったかも知れませんが、他は全くノータッチ。教師の手を借りずにきちんと間にあわせてくれた皆の頑張りに、本当に感謝の気持で一杯でした。何せ、新グラウンドで運動会準備を見つけて13年、前々日に飾付けがすべて運びこまれたのを見たことはありません。あんまり喜んで、翌日の一時には終礼をするといふらしてしまいで少し困ることになってしまいました。

土曜日は見事な晴天。準備は着々……。若干の手順の狂いで、時間はズレてしまいましたが、午後5時無事に「笑わせえるすまん」の完成。他のクラスの羨望の眼差しを感じつつ記念撮影。ただ、空に広がる雲に天気予報が重なって。不安もふくらみ始めました。わがクラスは解散、続いてKホームに「さようなら」。残るクラスはどうとう時間延長。粘りに粘るNホームも、日没の暗さには勝てず、勝負は翌朝に。「今年こそは、ヤグラで深夜作業の悪弊を絶とう」という呼び掛けに伝えてくれるか、心配しつつ帰路に。雲はますます低く、自分自身の高3の運動会前日の帰路の気持を思いだし、また寢床で聞いた雨の音すらよみがえるようで、本当にたまらない気分での夜は眠れませんでした。

午前5時、起きだして耳をすませても雨音は聞こえません。何とか……祈りながら新グラへ。1クラスだけもう作業中。6時開始の指示がそこだけ徹底していませんでした。しかし、他は指示を守り深夜作業はなかった模様でひと安心。6時になると他のクラスも続々やってきます。主任の来ているKとSは、生徒は全く姿を見せません。「余裕やね」言いながら、見上げた空からポツリポツリ。7時に近づくとかなりの雨足になり、何とも言いようのない気分。7時には開門を待ち兼ねた父母の皆さんが入場。とにかく「やるしかない」。その後も降ったりやんだりの空に気をもみながら、気がついてみると8時半近く。わがクラスのメンバーはやっぱり見当らない。余裕どころではなく、心配になってきました。「開会式の風船は？」結局いつものギリギリ登校のクセ抜け切らず、風船は断念。しかし、とにもかくにも午前9時、運動会が始まりました。

雨の心配も次第に消える中、3Sは実力発揮。全員リレーは圧勝。クラス対抗リレーも予定の逆転で連覇。騎馬戦はうまく逃げ回って勝利、全体の得点でも3位につけて責任競技での逆転を狙うも、綱引きの惨敗で夢破れました。しかし、責任リレーは松井・有沢の快走で逆転1位。立派な3位でした。

閉会式からすぐに後片付け。全員の協力見事で、またも1番で完了。他クラスの働きも立派で、籠尾先生に「今年の高3はよう働く。こんな学年は受験もえいはず」とほめてもらいました。翌日の片付けも皆の協力でいたってスムーズ。天気も味方して、完全に仕上がりました。ともあれ、準備・本番・後片付け、いずれをとっても立派な運動会でした。それだけで、この3年生、高い評価が得られるはず。願わくはその力が、これからの人生に活かされることを!!

66回生・3S担任 小村 彰  
(クラス通信『寿多Ⅲ No.10』より)



## 障害物!?

土佐高生活最大の思い出となる大運動会にやぐら作り。野球部員だった私にとって、やぐらは外野ノックのたんなる障害物。「今年も始まったか。邪魔」と思っていた。ところが、高3時は違った印象が。近くにいる現役部員がやけに遠くを感じられ、「高校生活も終わった」と感傷的に。私にとって、土佐高は文武両道を掲げ甲子園を目指す学校。夏の選手権も終わったその時期、はたしてやぐら作りは文か武か。やぐら作りで18歳のすべてを捧げる同胞には申し訳ないが、センター試験を待たずして、障害物は私を卒業式へといざなっていた。

楽しい思い出と言えば、クラス有志で開いたロッテリアでの打ち上げ。制服の白線を見ても「新グラと食堂、眠い数学」の記憶しかない私にとって、女学生と肌を寄せ合ってたわむれた貴むべき一時だった。

さりとて、やぐら作りは土佐高が一番。運動会当日、他校生徒の来場数が如実にそれを物語る。来年も、再来年も、若者たちの甘い記憶が紡がれていく……。

71回生・Sホーム 香曾我部 慶教



## 暑い夏の熱い思い出

槽づくりは、僕にとってバンドと部活が全ての生活から、受験生としての生活への大きな転機だった。「運動会が終わったら勉強するから、夏の間は夜何時に帰っても文句を言いな」と親に言い、自分にも言い聞かせた。「槽づくりを高校最後の夏の思い出にしよう」と。

設計を友達と二人でやった。二人だけじゃ思いつかない事もたくさんある。「目の丸い部分をどうやって作ろう?」周りのみんなに聞くと、「ビニール袋に何か詰めて丸みをだしたらいいがやない?」と誰かが答える。それにあわせて「じゃあ私、袋買ってくる」「俺、新聞紙ちぎって詰めるようにするわ。誰か一緒にやらん?」みんながすぐ動く。字がうまい奴は垂れ幕の字を書き、絵がうまい奴は背景を描いた。野球部の奴は雨が降った時、寮を飛び出し必死でブルーシートを掛けてくれた。みんながそれぞれ自分のできる事で一つになって槽を作った。

そして我がKホームは、みんなの情熱の結晶の槽と、有史以来初の女性の応援団長のもと、ほんとにうれしい優勝を勝ち取る事が出来た。

こうして、あっという間に高校3年の夏は過ぎ、青春って言葉がしっくりくるような暑い夏の熱い思い出となって今も心に残っている。

73回生・Kホーム 三橋 択実





## ただ感動!

高校3年間、いや、中学校から土佐校で過ごしてきた私にとっては6年間の締め括り行事とも言える運動会のやぐら作り。受験目前の私達にとって本当に最後の最高の思い出となった。

私達75回生3年Kホームのやぐらのテーマは「STAR WARSエピソードI」。各自得意分野を生かしての作成だ。一番のメインである立体の顔の部分は登場人物であるアマダラ女王。彼女の美しい顔を表現するのはとても苦労した。同時進行で背景パネルの作成もしていたが、教室で机を後ろに全部下げ、青いビニールシートを敷き、木の板を並べた。下書きを終え、色を付けていくのだが、遠くから見るのが出来ないためどんな仕上がりになるのか不安と期待が入り混じった複雑な心境だった。本番の途中で背景が変わるように模造紙にも絵を描いた。

仲間達と、時には冗談も言いながらの作成。普段あまり会話をしなかったクラスメイトとのふれあい。意見の食い違いで衝突したこともあったが、沢山のものを得ることが出来た。

そして垂れ幕の作成。これが私のやぐら作りのメインイベントだ。一枚は中学一年生から高校三年生までの責任リレーの走者の名前を、もう一枚は3Kみんなの名前をホームカラーである紫の布に白いペンキで書いた。責任リレーの方は各学年に聞きに行ったのだが、下の子達のちょっと緊張した顔が忘れられない。そして3Kの方は、クラスメイト一人一人の顔を思い浮かべながら書いていった。

男子達がやぐらの土台を組み、そこにパネルを貼り付け女王の顔を据え付けた。応援団が頂上に立ち、下の階段席には学生達が座る。

運動会当日の早朝、反対側の客席に回り出来上がったものを改めて眺めた。不安なんどこかへ吹き飛び、ただ感動したことを覚えている。自分達でこんな大きなものを作り上げたのかと思うと達成感が満たされ、これからの本番への意欲が湧いた。この運動会はきっと楽しくて生涯忘れられることの出来ないものとなる、そう確信できた。

## 75回生・Kホーム 有瀬 千春



## コンセプトヤグラに奮闘した日々

ついこの間、土佐中の入試に合格したと思えば、もう再来年の春は大学院卒業である。その間、でしゃばりたがりの血が騒いで中一最初のホームルームで委員長に立候補し、向陽祭を体験し、九州に修学旅行に行き、新潟にスキー研修に行き、ホームゲームで「俺の相手はいるのか!？」とはらはらどきどきし、そしてヤグラを建てた。この度、縁あってヤグラの思い出を一筆書けといわれ、こうして筆を…いやパソコンに向かっていく。

私が高校3年だった平成12年という年は、西暦2000年という時代の節目であり、二十世紀の最後の年であり、また土佐高校にとっては創立80周年という年だった。だからこそなのか、今年のヤグラは例年でないものを作ってやろう!と思っていたのは私だけではなかっただろう。その象徴ともいえる話があった。

ある日のこと、記憶が確かなら市原光太郎という友人に声掛けられた。その年のヤグラについて、名案があると。元々の発案者は違う人だと後から聞いたが、ともかくその話は、これまでの常識を覆す大名案だった。

コンセプトヤグラと勝手に名付けているそれは、全6組のヤグラを統一テーマでもって組み建てるというものだ。そのときに浮かび上がったコンセプトは「スタジオジブリ」。赤は「紅の豚」、白は「もののけ姫」、緑は「となりのトトロ」、紫は「魔女の宅急便」、黄色は「天空の城ラピュタ」、そして青は「風の谷のナウシカ」。それまではその年々の流行りのものをクラスごとに選ぶに留まっていたけれど、そうじゃなくて学年全体で統一感を出そうという発想である。

いいとこ尽くめのようなだが、デメリットもあった。統一テーマにすると、必然的にヤグラを選ぶ自由度が狭まるということだ。春から何回となく、各ホームの委員長クラスの面々が揃って「トップ会談」なり「実務者会議」なりを設け、話を煮詰めたが、それが逆に「一部のものだけで盛り上がりつつある」

という感を反対者側に与えたことは否めない。まとめ役の難しさをひしひしと感じたものだ。

そこで全クラス300人余を対象にアンケートをとった。コンセプトヤグラにするか否か。結果、僅差で統一テーマにすることとなった。次にどんなテーマにするかを公募し、絞り、決定した。公募で挙がった候補には、ルパン三世(ルパン、次元、五門、不二子、銭形、クラリス)、洋楽アーティスト(レッドツェッペリンやグリーンデイ、ディープパープルなど。ツェッペリンはRedじゃなくてLedなんだが)もあった。

統一テーマに反対する者が少なくないことも念頭に置くとすれば、あまり込み入ったテーマはよろしくない。結局は「二十世紀の偉人たち」ということになった。本誌の76回生のヤグラが古い人ばかりなのはそういう理由がある。ついでに、赤組がオードリー・ヘップバーンなのは、当時、午後の紅茶のCMに彼女が出ていたからであり、青組はぶるースリーという駄洒落だとか。

400文字くらいで、と言われていたのにだいぶ長くなった。でも書き足りない。それだけ濃い時期を過ごしたという証でもあろう。最後にひとつだけ。

それまで、ヤグラにはマニュアルが無かった。学校としては毎年作っているものだろうが、生徒にとっては最初で最後。だからこそ、ある程度の方向性が欲しかった。だから、その半年の行動なり騒動なりを総括として、時の特活部長山本こうぶん先生と担任の高田先生に手渡した。長いヤグラの歴史ではじめて、統一テーマのもとでヤグラを作り、はじめてヤグラの記録がこの時できた。今もその「総括」がコピーされて高校3年生の手元にあることを願う。

コンセプトヤグラは次の年には続かなかった。けれど、また将来、廃案となったスタジオジブリやルパン三世が並ぶことを夢見て、若い世代を見守りたいと思う。

## 76回生・Tホーム 岡田 晋典



## ルフィの笑顔

僕らのヤグラは漫画ワンピースをモデルにしたものでした。なんであのモデルになったのかは覚えていませんが、あのヤグラは79回の中でもトップクラスの出来栄だったと今でも思っています。なんとといってもこれは秋山さんと祖父江君というNの二大巨匠のおかげです。もちろんその他50人の協力があってのことですが、あの二人の絵はすごかった。まず原画ありきです。特に祖父江君一人で書いたあの背景一枚は土佐高史に残る大作なのではと思うほどです。それから、帽子の藁の使用は今思い返してもよくやったなあ。うまく接着剤が使えずに針金でまとめたりして様々な工夫をこらしました。そのおかげであの麦藁帽子だけ妙にリアルで色んな人にほめられた覚えがあります。また、斜めに吊り上げた立体部も好評でした。

僕自身としては苦労した覚えはほとんどありません。むしろ受験勉強のいい息抜きになっていました。他のクラスメイトがどうだったかはよくわかりませんが、まあみんな土佐高生らしくはっちゃけていたんじゃないかと思います。あえて挙げるとしたら、運動会が中途半端(準備の途中で延期の決定が下された)に延期になってしまい、作業を中断しやり直ししなければならなかったことがしんどかったかなあ。

だから楽しかったことしか思い出せません。

特に覚えているのは、休日にみんなで作業していたときに結局そんなに作業を進めずサッカーをやりにまわっていたこと。Nホームはなにかにつけて仲が悪いということが無かった。基本的に祭好きが多かったし。

今考えてみるとこの仲の良さがルフィの笑顔にも表れていたのかもしれない。

## 79回生・Nホーム 佐久間 敬一





## 高校生活の集大成として

高校3年生最大のイベント、体育祭のやぐら作りはクラス全員の協力がなければ完成できないものでした。私はやぐらの設計には関与していませんでしたが、友達が慣れない設計に苦勞しており、クラスを越えて相談し合っていたのをよく覚えています。やぐらを作る上で設計図はなくてはならないものです。毎日放課後運動場での作業も、設計をした者が中心となってやぐらを作り上げていきます。なので、クラスの為に設計してくれた友達にはとても感謝していますし、設計してくれたやぐらを立派に完成させたいと強く思いました。作っていく中で、計算が合わなかったこともありましたが、みんなで助け合って、本番までに立派なものが完成しました。

特に苦勞したのは、本物の藁を使って作る麦藁帽子です。麦が土台にうまくくっつかず、試行錯誤を重ね、帽子を作る為に何日間も費やしました。しかし苦勞だけあり、体育祭本番に、多くの先生方や保護者の方に麦藁帽子を誉めていただきました。

体育祭にやぐら賞があったのならば、絶対に自分達のクラスだ!という自信さえ沸く出来栄で、そのせいか体育祭の競技も頑張ることが出来ました。クラスメイトとの協力や励まし合いがなければやぐらは完成しなかったと思います。高校生活の集大成として、一つのものをみんなで作り上げるという事は、並々ならぬ努力が必要ですが、それ以上の達成感や確かな自信を私達は持つことが出来ました。

79回生・Nホーム 島崎 末奈



## すばらしい達成感

私は、中1の時に初めて、土佐校の伝統のひとつであるやぐらを見て、その迫力に圧倒されました。さらに、それを設計から組み立てまで全て高3生が生徒主体で1つのホームで1基作ったと知ったときはとても感動しました。その時から、私は自分が高3になったときには設計に携わりたいと思うようになりました。毎年毎年すばらしい出来のやぐらを見ることにより、その思いはますます強くなっていきました。

そして、高3の時はやぐら作りの委員をやらせてもらい、設計も担当させていただきました。初めはこんな大きい物の設計図とか書いたことないだろうという不安でいっぱいでしたが、次第に、自分がこれを書かないとクラスのやぐらが出来ないという思いでいっぱいになり、設計図の提出期限前の1週間は家でマッチ棒や割り箸などを使い、模型を作ってみたり、親に助言を求めたりと、夜な夜な作業をしていました。

実際に全体での作業が始まると、ハプニングの連続でした。みんな、あまり慣れない作業なので、計画した予定通りには行かず、どうしようと行き詰まることも多々ありました。その度にみんなで試行錯誤してどうにか前に進んでいきました。自分たちでどうしようもないと思った時には、先生方に相談することもありました。やぐら作りの期間は、常に頭からやぐらのことが離れませんでした。高3のやぐら作りは、みんなで協力してひとつのものを作り上げるという最後の機会だったので、初めのうちは消極的だった人たちも徐々に積極的になり、全員でやぐらを成功させようという一体感が生まれてきました。

体育祭当日の朝、ぎりぎりまでやって出来上がったやぐらは、みんなが納得のいくものに仕上がりました。本当にすばらしい達成感を味わえました。こんな大掛かりなものを52人で作り上げたことは、希少な経験であり、とてもいい経験になりました。この経験はいつまでも誇れることだと思います。こんな経験は土佐校だからできたことだとつくづく思います。

79回生・Nホーム 宮内 由希



## 辛かった、嬉しかった! 友情が深まった!

高校生活の思い出の中でも、櫓作りは特別なものとなりました。本格的な作業を始めたのは9月からでしたが、それは夏休みに下準備をして受験勉強に本格的に取り組み始めた時期でもありました。朝早くから夜遅くまで櫓作りに集中していた僕らは、普通の受験生が勉強する時間に作業をしていました。そのため、勉強するには寝る時間を割くしかなかく、肉体的にも精神的にも疲れ切っていました。

そんな状態になっても櫓作りを成し遂げようと思えたのは、一緒についてきてくれた友達のおかげです。正直辛いことのほうが多かったけれど、完成後、みんなで喜んだ時はこれまでにない達成感と充実感を味わえました。運動会の結果も見事優勝で、本当によかったと思います。このような経験は社会に出てからはなかなかありません。だからこそ、かけがえのない友情をさらに深めることができた櫓作りを大切な思い出にしていこうと思います。

80回生・Tホーム 吉岡 寛司



## 嬉しかったみんなの協力

運動会のやぐら製作の思い出について何か書いてと頼まれてかなり困りましたが、できる限り記憶を振り絞って書いてみようと思います。

僕たち、3Hは「生茶バンド」を造ることに決めました。何を造るかを決めたままではよかったのですが、そこから次の過程に移るのが一番大変だったと思います。設計図なんかは、提出日当日にフリーハンドで書いたような。もちろん、合格なんか出るはずもなく、天才・吉川君に、設計図から、資材の寸法、組み立て方までほとんどやってもらい、助かりました。いざ、造り出すと設計図通りには運ばないし、外は雨で背景の絵が乾かないと色々困りました。その分、早朝からや休日返上でやったり大変でした。そんな中でも、いい意味で笑い声は絶えなかったし、みんながよく協力し、よくまとまっていたと思います。しかし、運動会当日は大雨になり、翌日見ると、絵は破れ、張りぼても少し壊れていました。絵や張りぼての修復は、当日の朝早くから作業をはじめ何とか本番に間に合わせることが出来てよかったし、安心しました。運動会自体は、寝不足で辛かったのは覚えています。(笑)

委員として、みんなが協力してくれたことが有難かったし、運動会当日までにやぐらを造り終えることが出来てほっとしました。高校生活の中でいい思い出になりました。

80回生・Hホーム 西 真由





## 雨で背景がゴミと化す!!

やぐら製作に必死になっていた日々がもう1年以上前のことになりました。私たちOホームのやぐらと言うと、前々日の雨のために背景は落ち、張りぼても濡れてしまうという出来事を忘れることはできません。

運動会を翌日に控えた日、クラス一丸となり、誰もがやぐらを完成させることしか考えていなかったと思います。私自身、背景がゴミとなっているのを見た時は、言い表すことのできないような気持ちになったけれど、落ち込んでいる時間はありませんでした。嶋村未来ちゃんの家のスタジオに集合し、夜を徹して寝る間を惜しんで修復し、運動会当日にやぐらを見た時は、それは始めの計画とはまったく違ったものでしたが、私は新たなアイデアが加わった新たなやぐらのように思えました。

こうした苦難を乗り越えたやぐら製作は、クラスの仲間の知らなかった一面を発見できたり、一つのことを最後までやり遂げることを学んだ貴重な経験となりました。きっとこれからずっと記憶に残り続けると思います。

80回生・Oホーム 橋本 侑奈



## キングボンビーVSバイキンマン…!?

やぐら作りの思い出…と言うと、やぐらの題材決め時のことでしょうか? 人生で(と言ってもまだ19年しか生きていませんが(笑))あれほど「この場から逃げたい」と思ったことはなかったです(^\_^;) あれは、やぐらのハリボテに何を作るのかの最終決定をした日のこと、3K(紫)のやぐらの候補は茄子、道頓堀のグリコの看板のやつ、フリーザetc…無駄にたくさんある候補から、なんとか二つまで絞ったのはいいものの、その二つがキングボンビーとバイキンマンで、キングボンビーが男子、バイキンマンが女子とクラスを真っ二つに分けた争いに…男子のほうが圧倒的に多かったので、「まあすぐに決まるかな〜」と思っていたら、一部の男子が女子のプレッシャーに押しされ造反…生徒49人+先生がちょうど25人ずつに分かれて膠着してしまいました。最終的に先生の票を除いてキングボンビーに決定したものの、胃に穴が開くかと思いました。そして、女子の協力は無しで作らないといけなかな〜と思いました。ちなみに、後日協力を申し出てくれたときのO松さんが女神に見えました(笑) そんなことがあったので、やぐらを作るときの記憶がまったくありません、あしからず!

80回生・Kホーム 武市 尚大



## 一番の思い出!

土佐中に入塾して最初の運動会でまず思ったことは、ヤグラをはじめとする運動会のスケールの大きさでした。そこで初めてヤグラを見たとき、いざれ自分も高3になったら作ってみたいという思いが湧いたのを今も覚えています。そして、高3になりヤグラの設計という大きな役割を、西岡と共にやっていくことになりました。はじめは手探りの状態で、どういう風にやればいいのかわかりませんが、夏休みに学校などに集まり、設計やその他の準備を進めました。9月に入り製作に取り掛かりましたが、その中で嬉しかったことといえば、夏休み前までは受験勉強のために「俺は運動会の準備には関わらん」と言っていた友達が、積極的に手伝ってくれたことです。本番直前に対立したこともありましたが、今思えばこのヤグラ製作の期間が一番心に残っているような気がします。

80回生・Sホーム 三谷 祐一郎



## うちの子が一番!!

奈岐 「やぐら委員代表って緊張するねえ」  
ジョニー 「まあ色々あったきねえ。モスで話し合いしたが覚えちゅう?」

奈岐 「そこで決まっただけはテーマだけやった」

ジョニー 「ほんわかばっばー(笑)」

奈岐 「そうそう、ドラえもんやったきね。でもこのテーマのお陰で作業は平和に進んだがよ」

ジョニー 「ウチのホームはみんな協力的やったし、班分けて全員で作ったき、えいもんが出来た」

奈岐 「ジョニーが設計と発注は一人でやって、後は指示だしてくれただきね」

ジョニー 「君は隣でほんわかばっばーしよっただけやったねえ」

奈岐 「私は背景担当やったもん!四枚の背景の原稿書いたり、サイズ計算したりしたで」

ジョニー 「クラスで一番数学が苦手な人が計算したき、本番サイズが足りんなったけどね」

奈岐 「頭がほんわかばっばーやき」

ジョニー 「そういえば、前日組み立て作業しゆう時に雨が降って大変やったわ」

奈岐 「あれは寒かったー!みんなでビニールシート掛けて、足りん所もビニール袋掛けてガムテープで目張りしてね」

ジョニー 「あれしっかりやっちょいて良かったでねえ」

奈岐 「うんうん。当日色々壊れたりしちゃった中、ウチの子だけ無傷やった。ヒゲは曲がったけど(笑)」

ジョニー 「ヒゲにはこだわりが」

奈岐 「はいはい。あ、こだわりといえば、ドラえもんの色よ」

ジョニー 「あの青色、こだわって作ったねえ。いかにドラえもんの色に近くできるか!」

奈岐 「青と白と混ぜただけやったらいかんがって、黄色混ぜたりして頑張ったで」

ジョニー 「足りんなったらどうしようかと思った」

奈岐 「今度は足りたもん!塗料混ぜすぎて、クラスがシンナー臭くなって大変やった」

ジョニー 「みんなへろへろしよった(笑)」

奈岐 「時間に余裕が出来たら、竹トンボ作って遊びよったが見たで」

ジョニー 「ほんとはドラえもんに竹コブター付けたかったがやけど、サイズオーバーで付けれんかったき、記念撮影前に付けたがよ」

奈岐 「写真にはぼっちり写っちゅうね」

ジョニー 「どうしても付けたかったき、あれ当日朝に急遽作ったがやけど、作って良かったわ」

奈岐 「ポケットも人が入れる様になっちょって、中から顔出せるのが良かったねえ」

ジョニー 「三人ばあしか入れんかったけど(笑)でもこうやって見たら、えい感じやね」

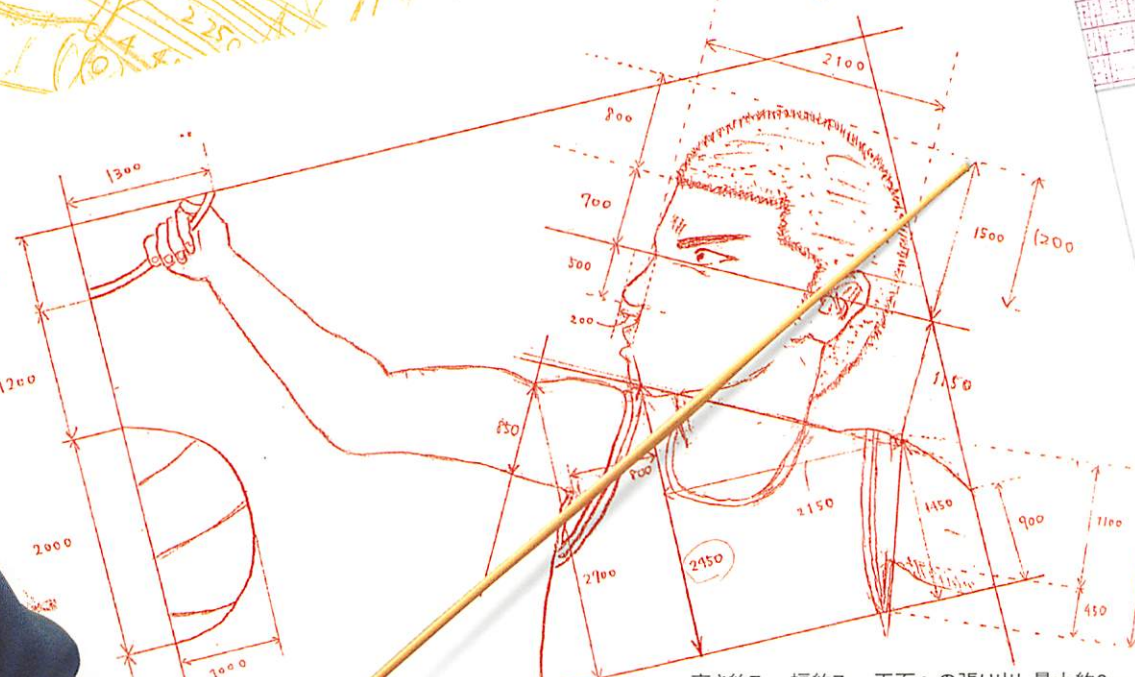
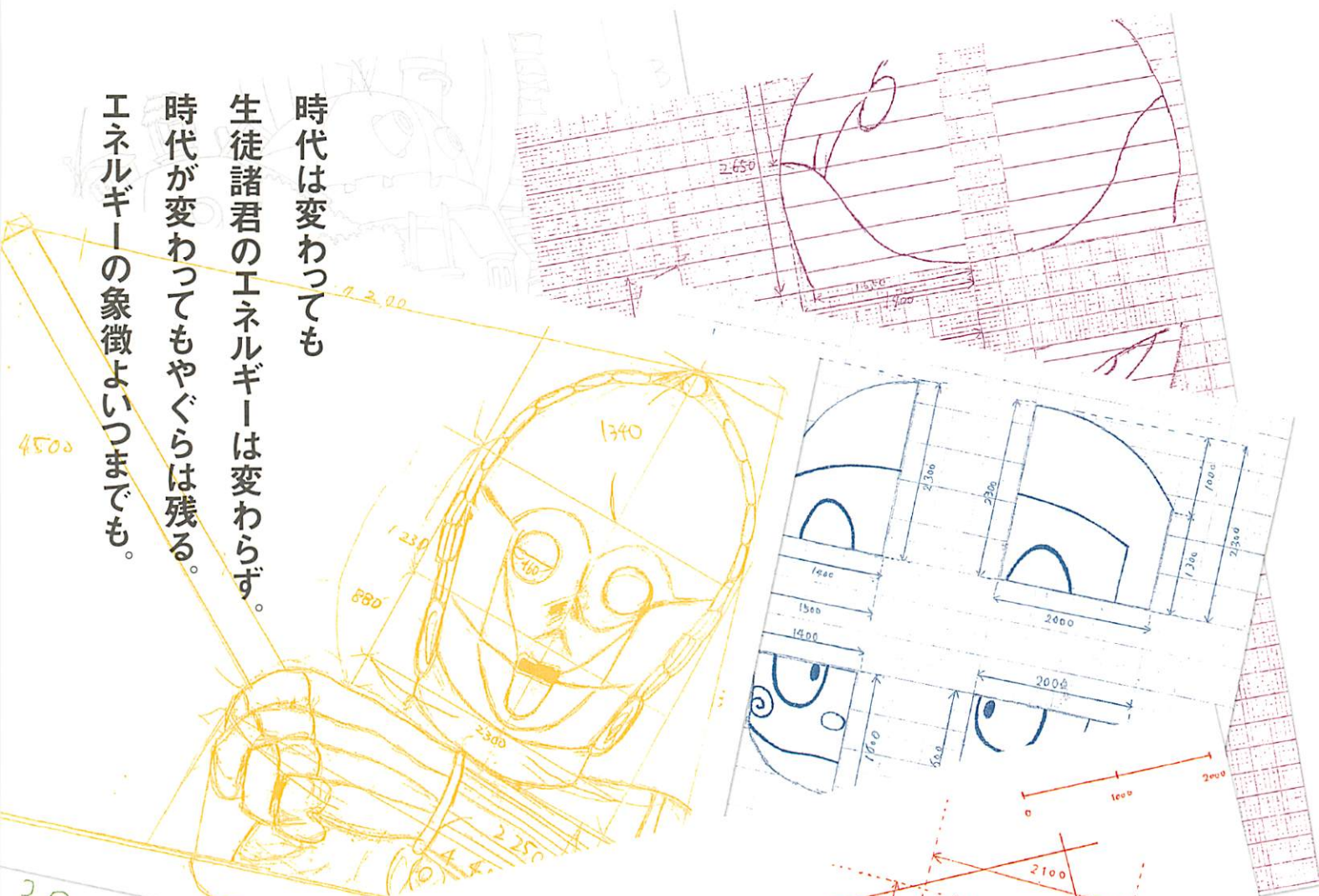
奈岐 「やっぱりウチの子が一番やね(笑)」

ジョニー 「そうやね(笑)」

80回生・Nホーム 中澤 仁貴

80回生・Nホーム 岡本 奈岐

時代は変わっても  
 生徒諸君のエネルギーは変わらず。  
 時代が変わってもやぐらは残る。  
 エネルギーの象徴よいつまでも。



土佐中・高等学校  
 特活部やぐら担当  
 仁尾 明彦先生

高さ約7m、幅約7m、正面への張り出し最大約6m  
 がやぐら全体のサイズ。建築資材をレンタルして、  
 各クラス統一の骨組みを組み立てます。



やぐらが  
 できるまで  
 79回生・Nホーム(ルフィ)



まずは、基本となる骨組みの組み立て



篤職さながらの高所作業

# 土佐中・高等学校応援歌

作詩／河野 伴香 作曲／平井 康三郎

一、青春 若き血潮はたぎる

われら わが友 今こそきそえ

勝利への道ましぐらに

見よ 向陽の 希望明るく

筆山の上 空にかがよう

ふるへ ふるへ

ふるへ 土佐高(中)

二、伝統たかき ほまれはかをる

われら わが友 今こそ示す

王者のすがた 堂々と

聞け 感激の 凱歌たからか

鏡川のべ 風にながるる

たたへよ たたへよ

たたへよ 土佐高(中)





土佐中・高等学校 同窓会